



Title	満洲国時代におけるモンゴル語近代用語の形成 : 『フフ・トグ (青旗)』紙を中心に
Author(s)	鉄鋼; Tiegang
Citation	大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー. 2015, 2015-5, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/51499">https://hdl.handle.net/11094/51499</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



**Osaka University  
Forum on China**

Discussion  
Papers  
in  
Contemporary  
China  
Studies

No.2015-5

**満洲国時代におけるモンゴル語近代用語の形成  
——『フフ・トグ（青旗）』紙を中心に——**

**鉄 鋼**

# 満洲国時代におけるモンゴル語近代用語の形成

『フフ・トグ（青旗）』紙を中心に

2015年4月20日

鉄 鋼\*

## はじめに

満洲国時代はモンゴル語の近代専門用語の登場の一大画期であった。それは、1920年代終わり頃から1945年までに、内モンゴルが置かれていた政治的情勢や歴史的背景によるものであり、そこで生じた社会変動は近現代モンゴル語の専門用語などの新語彙の形成に強い影響を及ぼした。

1941～45年の満洲国で発行されたモンゴル語新聞『フフ・トグ』紙には、近代的な語彙と思われる新語が多く見られる。これらの専門的新語の意味や概念について検討することは、近現代内モンゴルの社会変動を考えるための一つの重要な糸口であり、同時に近代モンゴル語と日本語との言語接触史を確認することでもある。いままでの関連研究では、モンゴル語の近代語彙は、中国語から導入されたことが強調されてきたが、当時の一次資料を再読すると、満洲国時代に日本語から導入されたと思われるところが少なくない。このため、モンゴル語近代語彙の変遷プロセスを日本語との関係で調べてみる必要があると考えられるのである。

### ・「近代語彙」からみる近代漢語とモンゴル語の言語接触

満洲国成立以前から中国語、または中国語経由で入ってきた日本語の語彙により生み出されたモンゴル語の単語がある程度存在する。

近代モンゴル語の生成についての先駆的研究を行ったフフバートル氏による『蒙話報』誌の研究では、モンゴル語の「近代語彙」をある特定の時代の語彙という時代区分の意味ではなく、近代的文化、社会構造、科学技術、工業生産などに関係のある語彙、つまり「近代化の語彙」「近代化がもたらした語彙」という意味で用いており、さらに近代的な意味や概念を表す語彙を西洋の言語から翻訳すること自体がアジア的な現象であった、と指摘する。そのため、東アジア漢字圏の諸国、とりわけ日本の言語学界ではその出典や漢字圏国との共通の語彙などを考察してきたこれらの語彙を、日本語で「近代訳語」「翻訳語」「新語」「漢語」「新漢語」「近代漢語」「近代語彙」、あるいは「文明のこぼ」「明治生まれの日本語」などと、取り扱い方や考え方によりさまざまな名称を与えて呼んできた。だが、いずれも学術用語としては定着していない[フフバートル2012:44]。

モンゴル語についていえば、東アジアの言語環境、とくに近代以前の清朝本土、日本、朝鮮半島あるいはベトナムなどの漢字文化圏の影響下にあるように誤解されることもある。しかし、実際はモンゴル語と漢語(中国語)は全く異なる語系であり、文法的、音声的に漢語と無関係である。モンゴル語は、アルタイ語族のモンゴル-テュルク系に属する。従ってモンゴル語の近代語彙の形成については、漢字造語とは関係なく、社会的、歴史的背景から語彙の意味や概念を強調して「近代語彙」という概念が重視されるべきである。その理由は、漢字圏の諸言語では近代語彙が漢字や漢字音と結びついていることが多いゆえに「漢訳語」

「近代漢語」「漢字借詞」などの多くの名称に「漢」の字が付着するが、漢語から翻訳され、モンゴル語となった意識語であるモンゴル語近代語彙の場合は、すでに漢字や漢字音の「殻」が剥かれているため、漢語や漢字そのものと関係がなくなっているからである。この「漢」つき語彙と関連して、これまで中国では、中国語に導入された数多くの日本製漢字の近代語彙を外来語として扱ってきたが、中国語と同じ漢字を使っていることから、とくに中国語の古典に由来する語彙については、それらの単語が近代的な概念を表すように意味が変化しているにもかかわらず、外来語、つまり日本語として認めがらない傾向もある。中国語における日本製漢字の近代語彙は、双方が共通の表意文字をもっているがゆえに成立可能な「語形借用語」であり、語彙の意味ばかりでなく、語彙の書写形式も借用されている。このような中国語における日本語からの「語形借用語」のことを中国語で「漢字借詞」と規定している [フフバートル 2012 : 44]。

つまり、モンゴル語の近代的な語彙の形成は、漢字圏の日本語や中国語から導入されたところが多いにもかかわらず、それはモンゴル語となった意識語であり、漢語の文法基準と音声要素とは無関係である。これに対して、ロシア語などからの借用語の場合は、キリル文字の表記法と発音が一致している。

## ・ 満洲国におけるモンゴル語新語彙の形成

満洲国時代におけるモンゴル語新語彙や科学的専門用語の形成については、『フフ・トグ』（青旗）紙から貴重な関連情報が得られる。同紙によれば、当時のモンゴル社会の発展は日進月歩であり、人々は専門的用語がますます欠けていると感じるようになり、言語面で混乱状態に陥っていた。人々が勝手に新語の翻訳を行ったためどれが正しいか分からなくなり、それはあたかも大海のなかで方向を失い航行している船のようであった [Kt28,1941.9.27]。

新語や専門的用語の造語という事業は、決して一人や二人の仕事ではなく、しかも誰でもできるものではない。当然、満洲国政府の政策、あるいは社会的に公認された学会が主導して進められたはずである。しかし、この時期の学会といえば、満洲国・興安西省開魯の「モンゴル文学会」以外、専門的用語などの新語彙作成事業を担当できる学会はなかった [Kt28,1941.9.27]。

「モンゴル文学会」は、満洲国時代に東モンゴルで活躍した学会である。学会の機関誌『ウラン・バルス（丙寅）』はモンゴル語の雑誌であり、創刊者はブフヘシクというモンゴル人である。彼は北平でモンゴル文学会を組織し『ウラン・バルス』誌の発刊を準備したが実現しなかった。同誌は、1933年満洲国で刊行された [達瓦敖斯樂 1987 : 209]。彼は、「モンゴル文化と民族の保持のため、かれの出版社を長期にわたって日本人の支援を受けつつ東部モンゴルで経営した」と、満洲国でフィールドワークをおこなったドイツの東洋学者ハイシヒは述べている [ハイシヒ 2000 : 340]。『ウラン・バルス』は、『フフ・トグ』とともに、モンゴル語の近代科学的用語の普及に最も重要な役割を果たした媒体である。

それまでモンゴル語には存在しなかった単語が満洲国時代に作られたことが、『フフ・トグ』紙と『ウラン・バルス』誌から窺える。たとえば、満洲国のモンゴル人地域は、すでに「自動車」などの近代科学を背景とする概念を受け入れていた。『フフ・トグ』紙に登場する「ayur-un terge」や「qei terge」といった単語をみると、モンゴル人は「原動機の動力で車輪を回転させ、軌道や架線によらないで走る車」という自動車の機械原理に対する認識ができていたと考えられる。18 世紀後半から蒸気機関・ガスエンジンによる自動車が作られたが、19 世紀後半のダイムラーやベンツがガソリンエンジン式自動車を発明したことにより実用化され、さらにフォードの大量生産方式によって大衆化した。日本へ入ってきたのは明治 33 年（1900）頃で、さらに東モンゴルへの輸入は 1934 年であった〔周太平 1994〕。自転車は当時の興安地域の各地でみられるようになり、さらに「nisqu terge」（飛行機）という単語も登場した。「nisqu terge」を直訳すれば、「飛ぶクルマ」という意味で、飛行機もモンゴル人の間に話題になっていた〔Kt1,1941.1.6〕。満洲国期、自動車はモンゴル人社会に流行し、豊かな家庭では中古車を買ひ、月に 80-100 円でロシア人運転手を雇用していた。それまで「カサク テレゲ」（qangγ-a terge = qasaγ terge）というモンゴルの伝統的な「車」で二三日かかる行程が自動車を使えば四五時間で到達できるようになったという〔内モンゴル近現代史研究所編 1988：175〕。同時に、türgen aburaqu terge（救急車）、bailduyan terge（戦車）、γaltu terge（火車）、čirüjü tataqu terge（張力車）という名詞も使われるようになった〔周太平 1994〕。

以下、『フフ・トグ』紙の記載から、モンゴル語の近代語彙が今日のモンゴル語に定着している例を掲げる。

日本語	モンゴル語	『フフ・トグ』の記載
育成	kümüjulün bütügekü	第 36 号 7 頁
音符	ayalyu-yin temdeg	第 37 号 7 頁
衛生	eregül qamyalal	第 37 号 7 頁
創作	egüdün bütegekü	第 46 号 7 頁
市場	delgebüri	第 46 号 7 頁
写生	bodatai jirükü	第 46 号 7 頁
真理	čoqom yosu	第 46 号 7 頁
装甲	quyaytu	第 46 号 7 頁
定価	toytaysan ün-e	第 56 号 7 頁
辞典	tolibičig	第 57 号 7 頁
注射	jegüü talbiqu	第 53 号 7 頁
地理	γajar jui	第 53 号 7 頁
地球	γajar-un bömbörčeg	第 53 号 7 頁
ラジオ	radio	第 86 号 2 頁
語解	üsug-ün tailburi	第 178 号 4 頁

満洲国期のモンゴル語刊行物を見る限りでは、上記の例のような、今日用いられるこれらの単語は、1930年代から1940年代半ばの時期に生成されたと考えられる。

満洲国時代にモンゴル語の科学用語や新語彙が形成され、普及していくうえで、ブフヘシクの貢献は少なくない。

ブフヘシク(1902-1943)は、1930年代の内モンゴルにおいて文学、教育、新聞と出版などの分野で重要な役割を果たした人物である。彼の漢語名は梁玉嵐、興安西省のナイマン旗出身である。1918年故郷の小学校を、1922年に直隸省立朝陽中学校を卒業した。その後1923年に北京の露文大学の法学部へ入学し、1926年に「モンゴル文学会」を設立した。この間、1925年に内モンゴル人民革命党に入った。1930-1932年、北平のモンゴル・チベット学校の教師を務め、のちに世界的有名な東洋学学者になったドイツのハイシヒ、アメリカのラティモアらにモンゴル語を教えた。1933年に満洲国の興安西省の所在地である開魯に来て省公署文教課長に就任、モンゴル文学会も北平から開魯に移転して、『ウラン・バルス』誌を発刊した。この時期にモンゴル語の活字印刷事業が活発となり、多くのモンゴルの文学作品や歴史に関する出版物が刊行された。ブフヘシクは、自ら執筆した『日本の教育見学日誌』を出版し、モンゴル語と日本語補習学校を設立し、加えてモンゴル文学会の運営の中枢を担った。1938年、開魯国民高等学校が設立されると校長に任命された。1940年、興安西省実業庁長(文教課長兼)に就任、1943年に逝去した。

## ・『ウラン・バルス』誌と『フフ・トグ』紙にみられるモンゴル語の新語彙

康德3年(1936)に発行された『ウラン・バルス』誌第3号に、つぎのような記載がある。「新語彙術語については、学会(モンゴル文学会—筆者)主事官ブフヘシクと会員チャロンガ、ウネンジャト、この3人が翻訳し、学会理事長ノルガルジャブが審査する。新語彙術語を認定することは翻訳事業において不可欠であり、諸会員はこれに準拠して使用すべきである。こうすれば新語彙は普及できるし統一できるのであり、このことはモンゴル文化の繁栄と振興にきわめて重要な役割を果たすのである」とある[バ・ソヘ2003:10]。さらに、『ウラン・バルス』誌第5号に掲載された「新語彙術語についての翻訳と認定」では、「わがモンゴル文化は近代的新文化から遅れており、近代的な教育図書が欠けており、また教科書に使われている新語彙術語も統一されていない」と指摘している[バ・ソヘ2003:11]。

近代的で新しい概念をあらわす言葉を造語することや、造語によりできた新語を認定すること、そしてそれを社会へ普及させることは、当時の満洲国のモンゴル人社会の近代化において一つの重要な課題であったことは疑いない。当時のモンゴル人の知識人たちは、日本人と協力して新語生成に最も大きな貢献を果たしたのである。すなわち、直接に携わったと思われる人物として、ブフヘシク、ノルガルジャブ、チャロンガ、ウネンジャト、ハスバートル、ラウンドンルブ、アムグランらの名前が『ウラン・バルス』誌に出ているが、このな

かには日本人も含まれていると考えられる。当時、興安地域に勤めていた日本人がモンゴル名を用いたことは少なくなかったからである。

『ウラン・バルス』誌には、二種類の新語彙が発表されていた。一つは、「すでに認定した新語彙術語類」であり、もう一つは「認定待ちの新語彙術語類」である。例えば、「*γajar-un bömbörčeg*」(地球)、「*eregül qamγalal*」(衛生)、「*čahilyan utasu*」(電話)、「*nisqu terge*」(飛行機)、「*surγan kömüjigülül*」(教育)、「*kemjijy-e qauli*」(規律)、「*erke čilöge*」(自由)などの言葉は認定済である。

同時に、未認定の単語として以下のものが掲げられている。すなわち、「赤道」「化学」「熱帯」「環境」「芸術」「潮流」「標準」「細胞」などであり、しばらくそのまま日本語の単語を使用することになっていた。これらは、いずれかの訳語が認定され次第、モンゴル新語として使用できることになる。

康德 8 年(1938 年)、満洲国国務院総務庁人事係が『公署用語教科書』を発行した。同書は、政治、経済、科学技術、学校教育、医療衛生、軍警などの分野に分類し、それぞれの単語のモンゴル語訳を掲載している。例えば、「行政官」(*jasay yabulaqu tüšimel*)、「技術官」(*uran erdem-ün tüšimel*)、「電動機」(*čakilyan mašin*)、「視学官」(*surγayuli baičayaqu tüšimel*)、「福祉」(*ed tüsalamji*)、「産業」(*körönyge*)、「教育」(*surγan kömüjil*)、「証券」(*temdegtü qayudasü*)、「原料」(*tügükei baray-a*)、「文化」(*udq-a soyol*)、「運動場」(*ködelgegen-ü talabür*)、「文法」(*bičig-ün dürim*)、「生徒」(*šabi*)、株式会社(*qubi neilegülqu*)などであり、これらの言葉は、今日のモンゴルの造語研究上、重要な意味をもっている。

1941 年 9 月 27 日の『フフ・トグ』紙によれば、モンゴル文学会が日本語の『学習便覧日用辞典』から単語を選択し、モンゴル語の新語作成の基本とすることになった [Kt28,1941.9.27]。

上述のごとく、モンゴル文学会は満洲国におけるモンゴル新語彙の形成と普及に尽力していた。同学会は、毎月未解決新語として日本語に基づいた 50 語を選択して、満洲国、日本、蒙古自治邦のモンゴル人と日本人 100 人以上の専門家に配布して、造語提案を幅広く募った。そして寄せられた提案を整理して専門会議で討論し、最もよい案を採択・決定した。この専門会議には、ノルガルジャブ興安西省長、チャロンガ秘書長、プフヘシク庁長、ウネンジャト課長、ハスパートル課長、国民高級学校教員アムグランとエルデニトクトフの 7 人が審査委員となり、昼夜会議が続いたという。この結果、康德 7 年(1940)末までに 1000 語の認定を行ったものの、さらに再検討・解釈が行われ、翌年の 8 月末にようやく発表にこぎつけた [Kt28,1941.9.27]。発表後の 9 月、専門会議は未解決の新語の検討に着手した [Kt28,1941.9.27]。

当時の『フフ・トグ』紙に審査・確定済みの新語が順次公開されていた。以下、そこから幾つかを列挙する。

「*tusqai arγ-a*」(対策)、「*örgetken ürejikülqu*」(拓殖)、「*turšimoi*」(探偵)、「*öndegen čayan*」(蛋白質)、「*bayčalan jakirqu*」(統制)、「*tedgümji*」(手当)、「*bodatu ügei*」(抽象)など、「T=タ」

行だけで 95 語が公表された [ Kt53,1942.3.21 ]

同紙の第 86 号には、「bartayan-i türsigçi」(探検家)、「niskegçi」(操縦士)、「qamturan kögıldükü küriy-elel」(共栄圏)、「nisqu terge」(飛行機)、「nisqu ongyoča」(飛行艇)、「usun-a širyuqu」(潜水)、「usun ayüngγ-a」(水雷)、「eldeb temdeglel」(雑誌)、「radio」(ラジオ)、「γajarčilaqu」(案内)、「γajarčilayçi」(案内者)、「tegegebüri」(積載)、「tegegebürilekü」(貨物を運ぶ)、「jügegebüri」(運輸)、「jügegen γaryaqu」(輸出)、「jügegen oroγulqu」(輸入)、「orolta」(収入)、「qolimal」(混合)、「nebterekülkü erdem」(通信機)、「ködelgegü erdem」(発動機)、「bairi baidal」(環境)、「qarayaljalγ-a」(待遇)、「angqarugçi」(監視)、「qarayul-ün çerig」(監視隊)、「manayul-un çerig」(歩硝)、「egešig-tü qairčag」(蓄音機)、「qajaiγsan tala」(斜面)、「nebterekülkü uran mergejil」(通信技術)、「ularil-un salkin」(季節風)、「dayučin」(音楽家)、「abuγsan temdeg」(受取証)などの新語が見られる [ Kt53,1942.3.21 ]

ここで例示したのはその一部であり、新語の確定と公表が 1945 年の敗戦まで続けられた。

『ウラン・バルス』誌と『フフ・トグ』紙は、それまで存在しなかったモンゴル語新語を日本語の近代語彙から翻訳し、専門的検討を加えて確定・公表していった。このような意味で、これら満洲国期のモンゴル語刊行物は「モンゴル語近代語彙登場の媒体」であったといえることができる。

## ・近代モンゴル新語彙にかかわるその他の要因

ここで、近代モンゴル新語彙の形成にかかわるもうひとつの要素として、モンゴル古語とロシア語からの借用語について、述べておきたい。明治時代の日本で、西洋の新しい概念を日本語に翻訳するのに、漢籍の中の古い漢語が多く使われたことはよく知られている。モンゴル語でも音韻や字の綴りが同じであっても、近代以前と近代以降とでは意味が異なる単語は少なくない。近代的な概念を表わすのに古くからあった単語が使われたとしても、今日、人々はそれを古い意味でなく、近代的な意味で理解し、近代的な意味で使っている。したがって、近代語彙の弁別にあたり重要なのは、外形的にその語が新しいか古いかではなく、その語の表す意味や概念が近代的かどうかであり、もしそれが近代的であれば、たとえ古くからあった語が使われていたとしても、その単語は近代語彙とみなされなければならない [ フフバートル 2012 : 45 ]。このような意味において、満洲国期に新しく使われるようになった一部の単語は、古くからあったにもかかわらず、もとの古い意味が廃れて、近代的な意味で使われていた。たとえば「ulay-a」という単語は、モンゴル帝国の第二代皇帝であるウゲデイ・ハーン(チンギス・ハーンの三男)の時代からモンゴル語に頻繁に出現する古語であり、かつ 1930 年代に東モンゴル地域に復活した単語である。新語として再登場したこの語の表す意味や概念は、古代的な「駅伝」ではなく、近代的な「郵便」である。同じく「qon ungšiqu」もその語の近世的意味の「読経」ではなく、近代的な意味の学校などで本を読むことである。

付言しておきたいのは、満洲国のモンゴル語の刊行物にロシア語からの音訳とみられるいくつかの単語が登場していることである。外モンゴル経由で入ってきたロシア語からの借用語は、基本的にその音声的基準にしたがって音訳語として使用している。とはいえ、このような単語は多くはない。さらに、主に 20 世紀はじめ頃から東清鉄道に沿い東モンゴルに輸入された新語もあるが、1930 年代に入ってから日本語の影響が絶対的優位となった。この後、1945 年以降は情勢が大きく転換して、ロシア語からの借用語が再び増加する。そして 1960 年代初期以降から今日に至るまで、中国語からの借用語が中国領内のモンゴル語の新語彙の主演を演じることになる。

## まとめ

満洲国時代におけるモンゴル語新語彙や科学的専門用語の形成については、『フフ・トグ』紙のような当時のモンゴル語刊行物から貴重な関連情報が得られる。1930 年代半ばから東モンゴル社会は著しく発展し、様々な分野において専門的用語の必要に迫られていた。近代的新しい概念や意味をあらわす言葉を造語することと、それらの造語 = 新語を修訂のうえ、世間一般に知らせることは、当時の満洲国のモンゴル人社会の近代化過程において一つの重要な課題であった。当時のモンゴル人の知識人たちは、日本人関係者と協力して、新語生成・普及に最も大きな貢献を果たしたのである。

## 参考文献

- 『フフ・トグ (köke tuy/青旗)』：1-178 号 (1941-1945)，青旗報社，満洲国・新京 [ Kt ] と略記
- Ba. Süke (2003) : Bökekešig kiged <Ulayan Bars>Sedgöl-ün Sudulul , Öbür mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy-a (バ・ソヘ (2003) : 『プフヘシクと「ウラン・パルス」誌研究』, 内モンゴル文化出版社)
- Urgedai.Taibung (1994) <Orčin Čay-ün Mongyol Kele Dekü šinjilekü Uqayan-nu tusqai Nere üge-ün Toqoi Nigen Sanal>Mongyol SoyolSudulul (周太平 (1994) : 「近代モンゴル語における科学的語彙の一見」 『モンゴル文化研究論集』 1994 年 11 月号)
- ハイシツヒ (2000) : 『モンゴルの歴史と文化』, 田中克彦訳, 岩波文庫
- フフバートル (2012) : 『モンゴル語近代語彙登場の母体—蒙話報誌研究』 青山社内モンゴル近現代史研究所編 (1988) : 『内蒙古近代譯叢』 第 2 輯, 内蒙古大学出版社
- 達瓦敖斯樂 (1987) : 「布和克什格創立的蒙文学会」 『内蒙古文史資料』 第 27 輯

## 从《青旗》报看“满洲国”时期蒙古语新词的形成

铁 钢

### The Creation of Mongolian Modern Terminologies in Manchukuo: Mainly Based on the *Köke tuy* (Qingqi)

TIEGANG

#### 摘 要

“满洲国”时期是近代蒙古语新词形成的一个崭新时期。20 世纪前半期，由于特殊的历史背景，近代蒙古语新词的形成经过了两个重要阶段。本文重点探讨“满洲国”时期蒙古语新词出现的具体实例，并将其定位为近代蒙古语专用名词术语中的一个历史现象。1941~45 年在“满洲国”发行的蒙古语报纸《青旗》报上，能够看到很多新词，考察这些新词的意义和概念，是探讨近现代内蒙古社会变动的重要线索，同时也是对近代蒙古语与日语的语言接触史的确认。据现有的相关研究，近代蒙古语的新词，多被强调是引用自中文，而重读当时的刊物资料发现，蒙古语借鉴日语的因素也有很多。因此，有必要进一步调查日语对近代蒙古语词汇的影响，同时也应该肯定“满洲国”时期形成的新词的历史意义及语言学上的研究价值。

(担当委员：堤 一昭\*)

<http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/box2/discussionpaper.htm>

---

\* 大阪大学・文学研究科・教授